「教育実習の手引き」改訂のための基礎的研究
－ 中学校版「教育実習の手引き」改訂のための基礎的研究 －
１．プロジェクトメンバー
○釜田聡教授
佐藤佐敏特任准教授
田村雅人研究員（上越市立大潟町中学校教頭）
石野秋広研究員（上越市立直江津中学校教頭）
田中和人研究員（上越市立柿崎中学校教頭）
２．研究の目的
平成２１年３月上越教育大学スタンダードと有機的な関連を図った教育実習ルーブリックを公表
した。上越教育大学スタンダードと教育実習ルーブリックは，約２年間，大学と上越市・妙高市の
教育委員会及び教育実習担当の教員と協働で作成したものである。学内においては，本学学生の実
態をつぶさに検討し作成した。しかし，教育実習ルーブリックは，主に本学の初等教育実習におい
て活用するために作成されたものである。中学校における実習，とりわけ教科指導に関しては，十
分に対応しているものとは言い難い。
また，これまで教育実習の事前事後指導で活用してきた「教育実習の手引き」については，当然
のことながら教育実習ルーブリックの活用を意図してこなかった。平成２０年，中学校学習指導要
領が改訂され，平成２４年度から全面的に実施することになっている。
そこで，本研究プロジェクトにおいては，中学校版「教育実習の手引き」改訂のための資料収集
及び現地調査等を行い，数年後の改訂に向けた視点を導出することを目的とする。
研究の目的に迫るため，次の２点を研究課題として設定した。
研究課題１：教育実習ルーブリックの活用を通じて，中学校用の教育実習ルーブリックの視点を導出する。
研究課題２：中学校現場を中心にしたフィールドワークを行い，初任者教員に求められている資質能力を明らかにする。
３．研究の概要
（１）研究計画
研究課題１については，三名の研究員が所属する中学校での実践を通じて，教育実習ルーブリッ
ク活用における成果と課題を検討する。
研究課題２については，東京都品川区の小中一貫校（伊藤学園）を訪問し，小中一貫校における
教員の力量形成や若手の研修の状況について資料収集を行う。また，東京都教職員研修センターを
訪問し，東京都が求める教師像や初任者研修の現状についてレクチュアーを受けたり，意見交換を
したりして「今求められる教師像（資質能力）」について資料収集を行う。
（２）研究の結果
①研究課題１
三名の研究員が所属する中学校での実践を通じて，次の意見が寄せられた。
・First Stage と Second Stage の境界について，厳格な定義はあるのか。
・First Stage と Second Stage，あるいはThird Stageの割合によって，どのように評価点を決め
るのかが曖昧である。
・中学校特有の項目が必要ではないか。具体的には，生徒指導上の危機管理などである。
・中学校は教科指導のウエイトが大きい。教科については，中学校独自の項目を検討してはどうか。
－
 30
－

・レベルが高い項目がある。現職教員でも難しいのではないか。
②研究課題２
訪問調査ア
日時平成２２年１月２２日（金）１０：００～１２：００
学校名品川区立伊藤学園（小中一貫校）
訪問者釜田聡，田村雅人教頭，石野秋広教頭，田中和人教頭
応対者青木哲男校長，羽鳥紀子副校長
伊藤学園教務室（筆者撮影）伊藤学園廊下（筆者撮影）
最初に，青木哲男校長先生から，施設一体型の小中一貫校「伊藤学園」の学校経営方針の説明が
あった。次に，羽鳥紀子副校長先生から，具体的な教育施策や校舎案内をしていただいた。
小学校６年・中学校３年という既存の枠組みを取り払い，系統的・継続的な教育活動を行ってい
ること，既存の小学校・中学校教育を１年～４年，５年から９年までと，小学校５年生に一つの節
目をつくった経緯などの説明があった。お二人の説明からは，子どもを中核とした教育活動を創造
することへのたゆまぬ努力が必要であることがうかがえた。また，小中一貫校のカリキュラム面ば
かりではなく，施設一体型の魅力にも目を奪われた。若手教員に求める資質能力について質問した
ところ，一人ではなく，チームで教育活動に当たることができる力が必要と回答があった。
訪問調査イ
日時平成２２年１月２２日（金）１４：３０～１５：３０
訪問先東京都教職員研修センター
訪問者釜田聡，田村雅人教頭，石野秋広教頭，田中和人教頭
応対者企画部企画課出張吉訓課長，長塚琢磨総括指導主事
研修部授業力向上課宮澤一則総括指導主事
教育開発課鳥屋尾史郎総括指導主事
最初に，東京都教職員研修センターの概要について説明を受けた。次に，東京都が独自で運営し
ている「教師塾」の成果と課題について説明があった。大学推薦を受けた学生の中にも，子どもの
前に立てないなどの課題を抱えている学生もいるという。続いて，上越教育大学のスタンダードと
東京都が求める教師像について協議した。そこでは，大学における教育の質保証と新採用教員とし
て求められる資質能力，教職員が生涯を通じて獲得していくであろう資質能力について今後も情報
交換していくことが必要であることが確認された。
４．成果と課題
上越教育大学スタンダードと教育実習ルーブリックの方向性については，おおよそ妥当であると
いう確認できた。今後は，個別具体的な事項について，実践を通じて検討することが課題である。
例えば教育実習ルーブリックの文言や，「教育実習の手引き」に記載する具体的な事例などを検討
することが喫緊の課題として挙げられる。
－ 31 －